東日本大震災から早くも3年が経つ。復興までの道のりはまだまだ続くが、ボランティアがメディアで取り上げられる機会が減っているのも事実だろう。追手門学院大学は、大阪府内の大学の中でもいち早く災害ボランティアネットワークに参画し、今も活動する学生は多い。その一方で、震災復興のため以外にも、さまざまな活動が学生ボランティアによって行われており、「楽しく」もキーワードのひとつに挙がる。今、学生がボランティアとして活動する意義はどこにあるのか。学内外でいくつものボランティア活動にたずさわる社会学部の山本博史教授のもとに、3人の学生が集い、本音で語ってくれた。

司会（松岡駿弥｜学生企画広報スタッフ）　今回は、ボランティア活動をされている方々にお集まりいただきました。ではまず、皆さんそれぞれの自己紹介をお願いします。

山本　社会学部の山本です。地域文化創造機構・副機構長も務めています。

岡田　経営学部・マーケティング学科・4年生の岡田拓斗です。学生ボランティアに登録していて、一昨年、昨年と東日本大震災復興のボランティアに参加しました。

勇　国際教養学部・英語コミュニケーション学科・3年生の勇照俊です。〈ボルカノVOLCANO〉で代表をしています。創立者でもあります。

清水　心理学部・心理学科・3年生の清水梨奈です。〈児童研究会〉、通称〝ちゃり研〟に所属しています。

司会　〝ボランティア〟とひと口にいっても、さまざまな方面での、いろいろな活動スタイルがあるようです。皆さんの話を伺いながら、あらためて学生ボランティアについて考えていきたいなと思っています。

▲祭の間は、“ボランティア”という意識はありません。（勇）

ボランティアは、誰のためのものか。

想いの数だけ活動がある。

司会　それぞれの活動内容を伺っていきたいと思います。岡田さんは、いわゆる「震災復興ボランティア」という言葉から連想するものに最も近い活動をされたのではないかと思うのですが、実際にはどのようなことを？

岡田　僕が参加したのは、瓦礫の撤去など、よくメディアで取り上げられているようなものではありません。宮城県亘理郡山元町へ行ってきたのですが、そこのイチゴ農園で、農作業のお手伝いをしました。雑草を刈ったり、土を掘ったり、肥料を撒いたり。僕たち若者が手伝うことで、早く震災前のようなイチゴ栽培が盛んな土地になればいいなと思いながら活動していました。

山本　活動報告も読ませてもらったんだけど、キーワードとして〝メッセンジャー〟という言葉があったよね？

岡田　活動後に、参加大学の学生たちでグループディスカッションをする機会がありました。メディアから受けるイメージほど復興はハイペースで進んでいるようには思えなかったことや、まだまだ必要なのにボランティアの数が減っていっていることなど、問題点についてもさまざまな意見が出ました。そんな状況の中、自分たちにできることは何だろうと考えた時、〝メッセンジャー〟という言葉が出てきたんです。活動をして終わりではなく、現地で見てきた様子やそこで感じたことを、生の声としてできる限り伝えてくことも僕たちの役割なんだと考えるようになりました。

初めて被災地に立った時は、声も出ず、身震いしました。校舎2階の青い看板のところまで、海水に浸かったそうです［写真左］。（岡田）

その場所を離れても、メッセンジャーとしての役割は続く。
——岡田 拓斗

▲一緒に遊んでいる時、目線は自然と子ども達の高さまで下がります。（清水）

これは、二年続けて参加したからこそ至った想いでもありますね。

司会　〈VOLCANO〉は、岩手県陸前高田市で行われる「うごく七夕まつり」でボランティア活動をされ、祭の〝盛り上げ役〟として好評だったと聞きました。

勇　〈VOLCANO〉の活動に興味を持ってもらった橋本・山本両先生に誘ってもらい、一昨年の8月に初めて参加しました。求められていた役割は山車（だし）の飾り付けと巡行のお手伝いだったのですが、それ以上に、関西特有のノリと威勢がそれまでにない活気につながったようで、非常に喜んでもらえたんです。そのおかげで昨年も呼んでいただき、続けて参加させてもらいました。この時には行く前から〝盛り上げ役〟として期待されていたのでプレッシャーもあったのですが、一昨年以上に貢献でき、役割を果たせてほっとしています。

山本　一昨年は私も同行していたんですけど、ほんとうにすごい盛り上がりでね。ただ、〝盛り上げ役〟として取り上げられることが多いようだけれど、前日の飾り付け作業でもしっかり貢献していたからね。

勇　はい、そこをまずきちんとやるべきだと思っていますから。

司会　一方〝ぢゃり研〟は、子どもを対象に活動するクラブで、今回のメンバーの中では唯一定期的な活動を行っている団体でもありますね。

清水　月に一度、茨木市内にある8カ所の保育所を分かれて訪ね、子ども達と遊んでいます。毎月第4日曜には、高槻市の百貨店で園児や幼児に、折り紙や糸電話などの簡単な工作を教えています。その2つが定期的な活動で、あとは「茨木フェスティバル」や「高槻ジャズストリート」などのイベント会場で子どもの遊び場を提供したりと、シーズンごとに依頼される活動を行っていますね。追大のジュニアキャンパスにも参加していますよ。

勇　ちなみに、どうして〝ぢゃり研〟なんですか？

山本　子どものことを「ぢゃり」と呼ぶことがあるからじゃないかな？　〝ぢゃり研〟と呼ばれることを、むしろ歓迎しているよね、揃いのT-シャツにもそう書かれているし。

清水　そうですね、通称なんですが〈児童研究会〉と呼ばれることのほうがもはや稀で、私たちも親近感を持ってもらっているようで嬉しいです。

ボランティアは生活の中の選択肢。

司会　そもそも皆さんがボランティアに参加しようと思ったきっかけは、何だったのでしょうか？

勇　高校の時、生徒会にいたのですが、そこで参加したのが最初ですね。学校にはボランティア部もありましたが、あまり機能していなかったので、学校へ依頼のあるものについては、生徒会が受け持っていたんです。僕はその担当で、いろいろな活動に参加していくうちに、普段交流のない人たちとも関われたり、日頃なかなかできない経験をする機会が持てたりすることで、楽しいなと思っていました。大学に入ってからは、いくつかのサッカーサークルにも所属してみたのですが、もっと充実した時間を過ごしたいと思うようになり、「もう一度ボランティアをしてみよう」とボランティアサークル〈VOLCANO〉を自ら立ち上げました。

岡田　僕は大学入学後もクラブやサークルに入らなかったのですが、それなら何か人のためになることでもやろうと、大学のボランティア登録をしたのがきっかけですね。そこからいくつかの活動に参加していたところ、追大が〈大学間連携災害ボランティアネットワーク〉に加わる形での東北支援を始める、という話を聞き、一昨年・昨年の8月に参加しました。大学の授業がある期間は、茨木市内にある社会福祉施設での活動などに参加しています。

清水　私は追大に入学が決まった高校3年生の時に、大学では何をしようかなとホームページで調べたりしているうちに〈児童研究会〉を知り、すでに入部を決めていたんです。ちょうどその頃、親戚の子どもがまだ小さかったのでよく遊んであげていて「子どもと一緒に遊ぶのって、なんて楽しいんだろう」と感じていた時期だったので。もう〈児童研究会〉に入るしかないなと。ただ、あまり活動が行われていない、形だけのクラブなら止めておこうと考えていましたが、入学後に部室を訪ねて話を聞かせてもらうと、一年を通して活動しているし、ここならぜひ入りたいとそのまま入部しました。

司会　話を伺っていると、それぞれに背景は違うけれど、ボランティアを特別な活動と捉えているのではなく、生活の中での選択肢として普通にあるのだなと感じます。

大切なのは定義よりも行動。

司会　ボランティア活動をする際に、意識していることはありますか？

勇　ひとつの活動に参加するにも人数は必要ですし、もっと多くの人に活動してもらいたいなと思っているので、〝楽しくボランティアをしていこう〟ということはいつも考えますね。楽しいことなら、より多くの人たちに参加したいと思ってもらえるでしょうから。面白い活動を選ぶこともそうですが、どんな活動でも楽しみを見つけながら取り組めるように心掛けることが大切だなと感じています。メンバーたちにもそう働きかけていますし、どうしても楽しみが見つからない場合はその活動に無理に加わらなくてもいいよ、と伝えています。

山本　〝ぢゃり研〟もそうじゃない？　活動しているところを見ていると、楽しそうにやっているなと感じるから。

清水　そうですね。たとえば、茨木フェスティバルでも子ども達にダンボールの巨大迷路を作って遊んでもらうんですが、「入るのが怖い」という子がいたら手をつないで一緒に入ってあげたり。そういう時はもう純粋に〝子ども達と遊んでいる〟という感覚ですよ。

岡田　僕は個人で大学のボランティアに参加しているので、ほとんどの場合が初対面の人たちとの活動です。それでも宮城での活動では、同じ屋根の下で寝食を共にしているとすごく親しくなれますから、作業以外の部分での楽しさも活動の醍醐味となっていきますね。

司会　ボランティア活動を通して、自分のここは成長したなぁと感じるのはどんなところでしょう？

清水　始めたばかりの頃は、共同作業の場面で自分の考えていることを上手く言えないことも多かったのですが、今ではずいぶん説明できるようになった気がします。あと、苦手なことや面倒なことがあっても、逃げたり押し付けたりせず、仲間と相談しながらきちんと正面から向き合って対処できるようになったなと思いますね。

岡田　僕の場合は、「意識する力」でしょ

どうすれば楽しいボランティアになるか、をいつも考えている。

——勇 照俊

ENJOY VOLUNTEERING

社会学部｜社会学科
Hiroshi Yamamoto
山本 博史 教授
地域文化創造機構・副機構長をはじめ、学外でもさまざまな委員を務める"世話人"。実地での体験・学びを重んじ、哲学とトランペットをこよなく愛する。

▲ここで栽培されたイチゴが、この冬、震災後初めて出荷されたんです。（岡田）

心理学部｜心理学科
3年生（取材時2年生）
Rina Shimizu
清水 梨奈 さん
子ども好きが高じて脇目もふらずに"ぢゃり研"へ入部。誰とでもすぐに親しくなれるキャラクターを買われ、今年は情報・宣伝担当にも抜擢された。

経営学部｜マーケティング学科
4年生（取材時3年生）
Takuto Okada
岡田 拓斗 さん
個人登録して活動を続ける学生ボランティアのスペシャリスト。ボランティアに興味のある人へのメッセージも「したいなら、すべし」と明快で無駄がない。

国際教養学部｜英語コミュニケーション学科
3年生（取材時2年生）
Terutoshi Isami
勇 照俊 さん
1年生の時に〈VOLCANO〉を創立した行動派。初代および第三代・代表を務める。類い稀なリーダーシップを発揮しながら、自らが楽しむことも決して忘れない。

ボランティアを通して みんな何かを届けているのだと思う。

——山本 博史

ENJOY VOLUNTEERING

私にとっては、相手に楽しんでもらえることが一番大切です。

——清水 梨奈

うか。よく分からない状況からスタートしても、目の前の事実や周囲の様子を気に掛けながら作業を進めていくうちに徐々に把握できたり、考え方が変わることにつながったりするので、些細なことにも〝意識的でいよう〟と思うようになりました。

勇　積極性がさらに増したように思いますし、視野や発想も広がっている気がします。メンバーの取り組み方を見て感心することも多いですから。ものの見方や考え方って、想像以上に型にはまったものだったんだなと気付くことができました。そういう部分は、日々の暮らしでも活きているなと思うことがよくあります。

司会　皆さんはそれぞれ活動スタイルも違うわけですが、自分の言葉で〝ボランティア〟を表現するとすれば、どのようなものになるでしょうか？

勇　最初は「双方がWIN-WINであること」と捉えていたのですが、実はさまざまな活動をするたびに考えが変わってきていて、今も明確な答えを出せていないんです。卒業するまでにはなんとか相応しい言葉を見つけたいとは思っているのですが。今思っているのは、たとえグループで活動していても、ひとり一人が違った定義を持っていていいんじゃないか、ということですね。

岡田　僕はわりとシンプルで、まずは相手のために役に立つこと。そのうえで自分が何かを見いだせたなら、それを成長の糧にできればいいなと。たとえ何も見いだせない場合でも、相手の役に立つことができればOK、という感じです。

清水　私にとっては、相手に楽しんでもらえることが一番大切です。特に子どもが対象だと「イヤだ」とか「たのしくない」と反応も明快なので、そう思われないように考える。それもまた楽しいんですね。

山本　〝ボランティア〟を定義することはとても難しいし、何かを掲げることよりも実際に行われている活動こそが大切なんだよね。そこにすべてが現れているはずだから。みんなの活動を見聞きしていると、それぞれが〝何かを届けている〟と言えるんじゃないかなぁ。〈VOLCANO〉は、活気を届けている。岡田君たちはメッセンジャーとして、被災地での経験や見聞きしたことを被災地以外の場所へ届けている。〝ぢゃり研〟は子ども達に楽しい時間を届けている、というように。

「やってみたい」がすべての始まり。

司会　学生はボランティアをするべき、でしょうか？

岡田　「するべき」だとは思いません。僕自身が教わったことなのですが、ボランティアは「やらされる・してあげる」ものではない、と思います。相手のことを考えればいい加減にしてよいものではありませんから、自分ができる時間にできる範囲で「やろう」と自発的に取り組むのが〝ボランティア〟なのではないでしょうか。

山本　「するべき」が当てはまるとすれば、自分の中に、ということなんだろうね。「これは自分が関わるべき活動だ」というような。ただね、実際にボランティアに参加すると上手くできることばかりじゃないだろうし、失敗することもあると思う。その時に「なぜ上手くいかないんだろう」「どうすれば上手くいくだろう」と考えるだろうから、そういう意味では非常にいい〝体験・学びの場〟だともいえるわけで。だから、「するべき」とは言えないけれど、機会があるなら興味を持って参加してほしいなとも、個人的には思っているんです。ボランティアをあまり敷居の高いものと考えず、〝サポーターになる〟くらいの気持ちから始めてみるのもいいんじゃないかな。

司会　友達や知り合いを仲間に誘う場合、どのように勧誘しているのでしょう？

岡田　僕の場合は直接的に勧誘するということはありませんが、自分の体験を話すことで興味を持ってもらえ、参加してもらえると嬉しいですね。

清水　〝ぢゃり研〟の活動はほんとうに楽しいんですけど、準備のために自分の時間を割かなくてはいけない場合や、楽しいだけではない部分もあるので、そこもきちんと伝えるようにはしています。

勇　〈VOLCANO〉は、楽しさを前面に押し出していますね。まずは、楽しく活動を続けてもらって、徐々にボランティア自体の面白さを理解していってもらえれば、と考えていますから。

司会　この記事を読んで興味を持った方は、自分に合った活動を選んで一度体験してみるといいのではないでしょうか。ひとりで参加するのがこころもとなければ、友達と一緒でもいいでしょうし。「気軽に」「楽しく」参加してみるのも、これからのボランティアの、ひとつのあり方なのだと感じました。皆さん、本日はどうもありがとうございました。

［司会］心理学部 心理学科
3年生（取材時2年生）　松岡 駿弥

Talk Session　追手門の、カラフルな、ボランティア事情

▸司会PROFILE

心理学部／心理学科
3年生（取材時2年生）

Toshiya Matsuoka
松岡 駿弥

学生企画広報スタッフ。今回、トークセッションの司会を初めて担当した。3年生の今年は、スタッフの中核を担う年。さらなる飛躍も目前だ。

司会者のヒトコト

ボランティアも楽しんでいいんだ、という発見があった。

ボランティアには、参加する前にあらたまることを求められるような敷居の高さも感じていたのですが、実際にボランティアをされている人たちが笑顔で心底楽しそうに話されているのを聞いていて、自分にもやれそうだな、やってみたいなと思いました。

追手門で ボランティアに参加しよう！

Become a Volunteer

›› クラブ

ぢゃり研［児童研究会］

子ども（＝ぢゃり）を対象とする活動を行う歴史あるクラブ。茨木市内の保育園訪問や、駅商業施設での児童を対象とした工作教室など、一年を通じてコンスタントに活動を続けているほか、「高槻ジャズストリート」や「茨木フェスティバル」の子ども広場でも活動を行っている。今年は、今までにない新たな企画の実現も目指している。

›› サークル

VOLCANO［ボルカノ］

“楽しくボランティア”をモットーに、独自の路線を歩む。岩手県陸前高田市の「うごく七夕まつり」で好評を得たのをきっかけに、“盛り上げ役”としての本領が確かなものとなった。新作狂言「茨木童子」発表イベントではお練りに参加。「鼓動初め（たたきぞめ）」では、うごく七夕まつり・川原祭組と共にステージデビューも果たしている。

›› ボランティアへの個人参加

大学間連携災害ボランティアネットワーク

東北学院大学が中心となって立ち上げられた、全国の有志大学から成る災害ボランティアネットワーク。追大は大阪府下で最初の加盟校として参画し、震災復興を支援している。主に、夏期休暇を利用したボランティアとして学生を募り、派遣している。地元の人たちはもちろん、他大学の学生とも交流しながら活動。事前セミナーや報告会も行われる。

個人でもボランティアに参加できる！

本学でボランティアに参加するためには、上記のようなクラブやサークルに所属するほか、個人でも参加することができます。参加希望の方は、ぜひ学生課まで。

ボランティア参加手続き

1. ボランティア登録カードを学生課（1号館1階）に提出。
2. 面談（登録カードに記載した内容と希望する活動内容の確認など）
3. 活動先の選択
4. 活動先への受け入れ確認
5. 保険手続き（一部自己負担となります）
6. ボランティア活動

主なボランティア先

東日本大震災復興ボランティア
24時間テレビ募金活動・大阪マラソン
老人ホーム・児童養護施設など

申し込み・お問い合わせ

学生課　072-641-9627